

## 〔浜松市長賞〕

カラスのファンになる日

浜松市立鴨江小学校 四年 小澤 響

「カラスは、よくばって全部の色をほしがって体にぬったから、体の色が黒くなったんだよ。」カラスを見る時、ぼくは図工の先生から聞いたその話を思い出していた。「ふくろうのそめものや」というお話のようで、鳥の羽をきれいにそめてくれるというふくろうの元に、白い羽が自慢のカラスが羽をそめてもらいに行く。カラスが一番美しい色にそめてもらおうとよくばり全部の色を重ねぬりした結果、黒い羽になる。そういうお話だそうだ。「カラスがもし黒い体じゃなかったら、カラスの運命は今とちがっていたのかも。」もしもカラスがフラミンゴのようなもも色だったら、カラスはきらわれ者ではなかったかもしれない。その時のぼくにとってカラスは「黒くて、大きくて、こわい」そんざいでしかなかった。

「カラスのいいぶん」を書店で手に取った時にも、カラスに対してそんなイメージを持っていた。だからこそ、カラスのいいぶんも聞いてみたくなった。読んでみると、日本の街にいるハシブトガラスは、もともとは森に住んでいたが、人間が森の近くまでくらしをひろげたせいで、ゆたかな食料がある人間の生活する場所まで入ってきたこと。カラスが人をおそうのは子育てをしている時だけで、決して理由なく人をおそわなということが分かった。確かに、カラスはこわいというイメージがあるが、実際に自分がおそわれたことはない。相手のことをよく理解せず一方的なイメージではんだんするのは良くないことだ。これは、カラスに対してだけでなく様々なことに対して言えることだと思った。例えば、こわそうな人が実は話してみるとやさしい人だったり、むずかしそうな算数の問題が解いてみると、案外かんたんだったりする。「カラスのいいぶん」の作者も、最初はふんを落としたり、物をぬすんだりするカラスに対し

て「いやなやつ百パーセント」という感情だったが、カラスに向き合い理解しようとしたことで最後にはすっかりカラスのファンになっていた。「カラスのファン」とはすごい言葉だな、ぼくもカラスをよく知り正面から向き合えば、いつかカラスのファンになれるのだろうか。

家を出ようとして、となりの家のへいにとまっているカラスと目が合った。カラスと目が合うなんて人生で初めてだった。カラスの丸くてやさしそうな目から目をはなせずにいると、その目が少し青い事に気付いた。気になって調べると、巣立ったばかりの子どものカラスの目は青みがかったらしい。カラスについて調べるなんて人生で初めてだった。しばらくして、庭の花だんから飛び立とうとしているカラスを見かけた。その黒い羽は太陽の光でところどころきらっとにじ色にかがやいていた。次はカラスの羽の色の不思議について調べよう。ぼくは少しずつカラスのファンに近づいている。

書名 カラスのいいぶん

人と生きることをえらんだ鳥

著者名 嶋田 泰子

発行所 童心社